

北海道えりも町油駒遺跡出土の砂沢式土器

松本 建速 1)

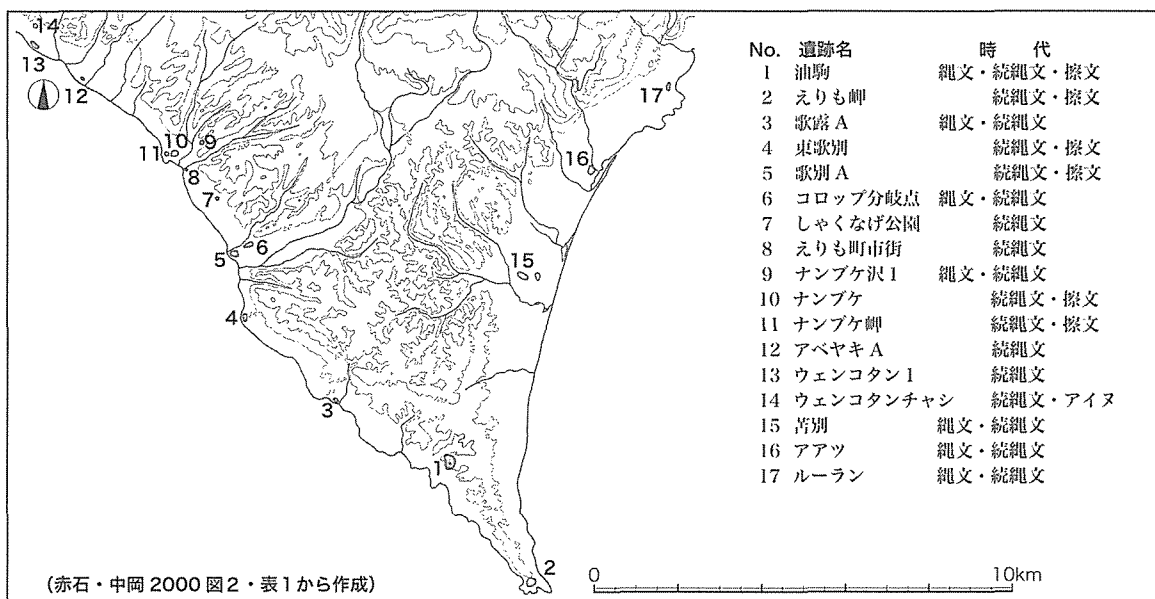
1. はじめに

3000～2500年ほど前、日本列島のうち、本州島以南の人々は水稻耕作や雑穀などの栽培を始め、考古学的にはその時代を弥生時代と呼ぶ。そして、この時代から、北海道島と本州島に暮した人々が異なる生活様式を持つようになったと考えられている。両地域の文化を分ける指標は、水稻耕作や栽培農耕をおこなったか否かである。それらをおこなわず、縄文時代と同様の採集・狩猟により、食料を得ていた社会が続いたと考えられている北海道島の人々の暮らし・文化を、考古学では続縄文文化と呼ぶ。この時代は、本州島の弥生時代～古墳時代にあたり、7世紀頃まで続くことになる。

しかし、縄文時代以来、北海道島の人々と本州島の人々とは、互いに交流を続けており、片方で水稻耕作を始めたからといって突然その関係が切れたなどということとはなかった。とくに、北海道島の太平

洋沿岸地域には、本州東北北部の人々との交流の痕跡が散見される。本稿では、北海道日高支庁の最南端にあるえりも町油駒遺跡出土の砂沢式土器を対象として、本州島と北海道島の人々の交流がいかなる内容であったのかを考える。

なお、この小論は、2008年8月20・21日の両日、東海大学文学部による北海道研究の一環として実施された調査の結果の一部である。それは、北海道における本州島産土器の全貌を明らかにし、本州島と北海道島の両地域の人々の交流を考察するためにおこなわれた。2008年度は日高支庁全町の教育委員会が所蔵する資料を悉皆調査した。参加メンバーは、松本建速(研究代表・東海大学准教授)・宮原俊一(東海大学助教)・横山諒人(東海大学文学部考古学専攻4年)・岩崎恒平(東海大学文学部考古学専攻3年)である。



第1図 油駒遺跡と周辺の続縄文時代遺跡の位置

1) 東海大学文学部歴史学科考古学専攻 takehaya@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp

2. 油駒遺跡出土の砂沢式土器

油駒遺跡は、襟裳岬南端から北に約 3.6km、岬の西海岸から内陸に 600mほど入った段丘面上に位置する(第1図1)。地籍はえりも町字本町206番地である。遺跡上を走る町道油駒折別線に沿っておこなわれた凍雪害防止工事に伴い、1998-99年に発掘調査が実施され、2000年には報告書が刊行されている(赤石慎三・中岡利泰 2000)。約11万点の土器が出土し、その中心は縄文時代晩期最終末葉-続縄文時代前期初頭頃のものであった。縄文早期・中期末葉のものが少量含まれる。

今回の悉皆調査では、報告書見掲載資料も含め、出土遺物のうち文様のわかるものはすべて実見したが、大洞A式そのものと見られる土器は出土していなかった。それに対し、砂沢式土器は報告書に12点掲載されているが、今回実見して、それらは本州島東北北部地域産の可能性が高いと思われたので、それらを紹介する。ここに示した第2図は、報告書「図34」を転載したものであるが、1の突起先端部に破損部を示す線を加え、1-10・12の断面図の傾きを若干修正した。

第2図1-12は砂沢式土器である。1・2は高坏、11は小型鉢、12は壺と推測される。2-10は浅鉢と考えてほぼ間違いのないであろう。第2図1は第3図に示した砂沢遺跡の例では、突起の大きさから考えて、1に類似する高坏であろう。突起の先端の破損状況から、本来は二股に別れていたことがわかる。第2図2の突起には3条の沈線が刻まれるが、このような大型の突起は、高坏(第3図1)か浅鉢(第3図3)に付くものである。ただし、その突起の下に位置する口縁部に付く瘤が付けられた位置が膨らんでいるのは高坏である。したがって、第2図2は高坏である。第2図3-5は第3図2のように、胴部下半に縄文が施される浅鉢であろう。第2図6・7は胎土や色調から同一個体と思われるが、第3図3のような縄文が施されないタイプの浅鉢になる。

第2図10は口唇部が平坦になる高坏かもしれない。第2図11は口縁部上端に縄文帯が巡る。小型の鉢の可能性もある。第2図12は壺であろう。第2図8・9は胴部の一部しか残っておらず、全貌がわからないが、浅鉢の胴部と思われる。

3. 砂沢式土器に共伴する土器

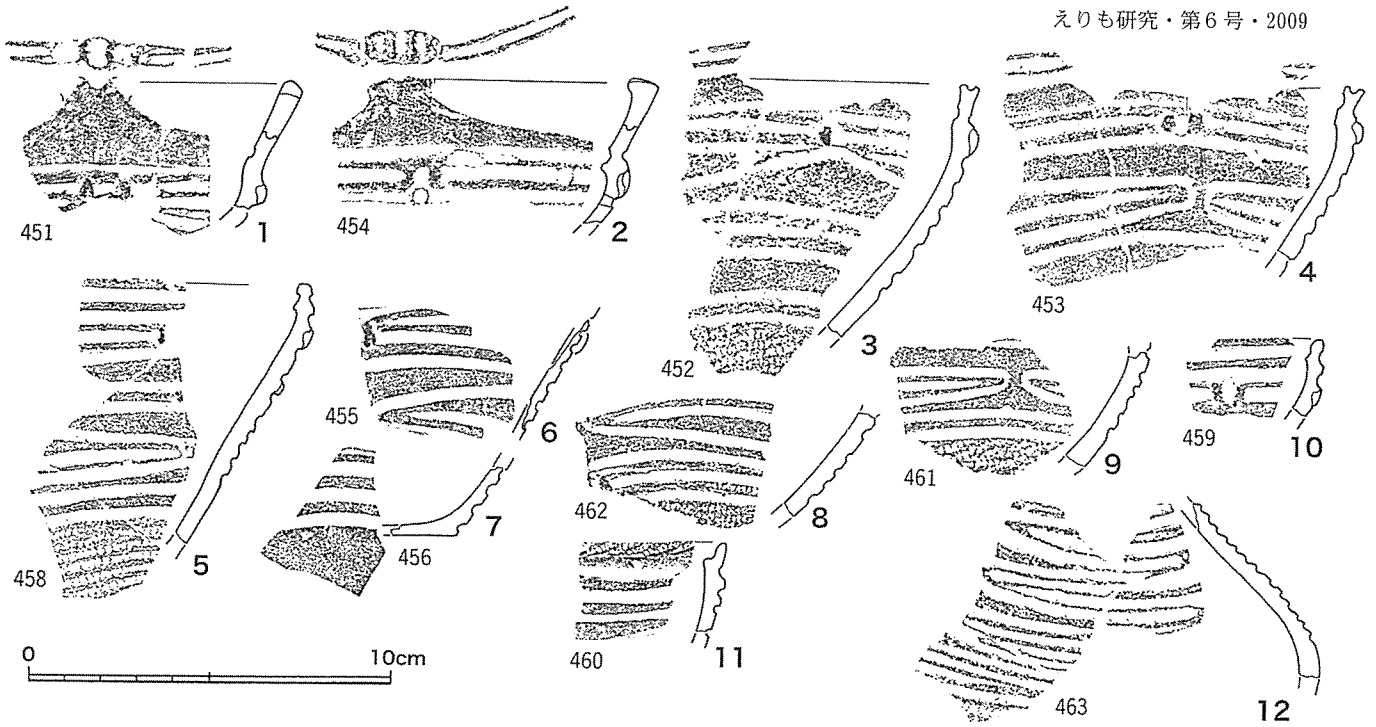
第4図は、東北北部では砂沢式土器併行期に見られる入組文系の土器である。口唇部に刻みがある点は下北地方的特徴である。1-4は形態や大きさから、釧路市幣舞遺跡出土例(石川1996)のような深鉢の可能性もある。第4図6は台付鉢であろう。口唇部に刻みが入れられ、地紋の縄文の上から沈線で文様が描かれている。類例が、下北半島の青森県川内町戸沢川代遺跡に見られる(葛西・高橋1991)。

これらの文様は連結入組文(註)と呼ばれ、渡島半島から青森県北部に分布の中心がある縄文晩期中葉以降の入組文に連なる系譜上にあると評価されている(福田2007)。油駒遺跡もその例に入るが、北海道の続縄文時代初頭には日高地方や釧路市のような太平洋沿岸部にも多い。

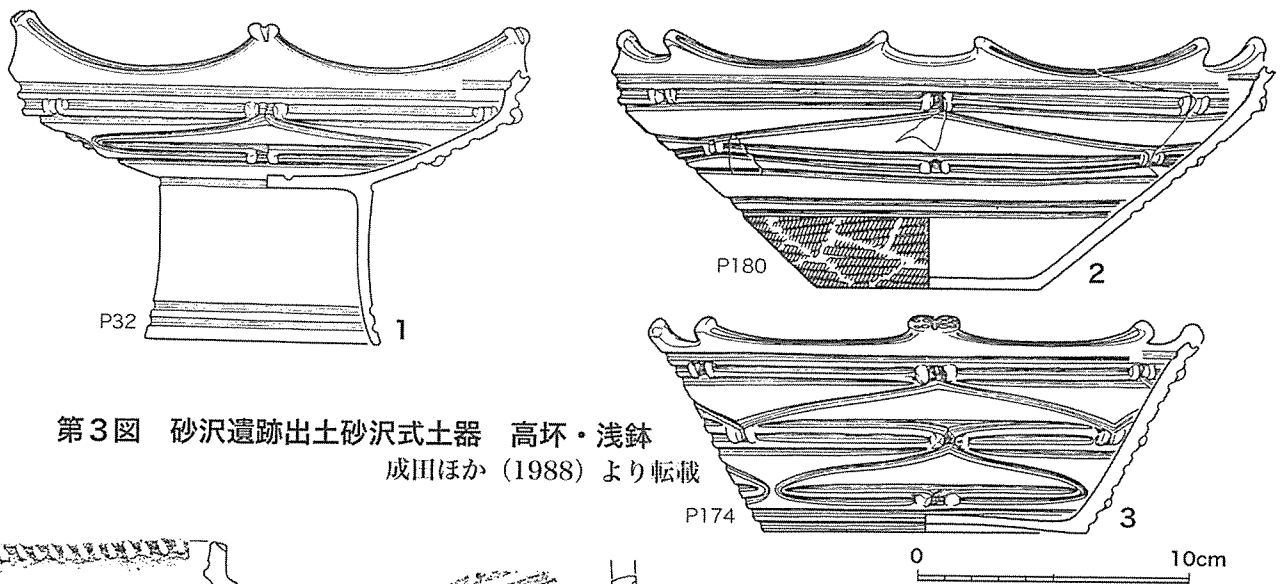
第5図は油駒遺跡から出土した土器のうち、日高地方に一般的な土器である。すべて深鉢である。文様については、大きくは5様に分けられる。1-4のように、入組文的な文様を持つもの、5-9のように、沈線を2-数条巡らせるもの、10-13のように、縄線文を2-数条巡らせるもの、14・15のように、地紋縄文だけが施されるもの、16・17のように、地紋縄文の他に、口縁部に内面から突瘤文を施すものである。

4. 砂沢式土器の産地

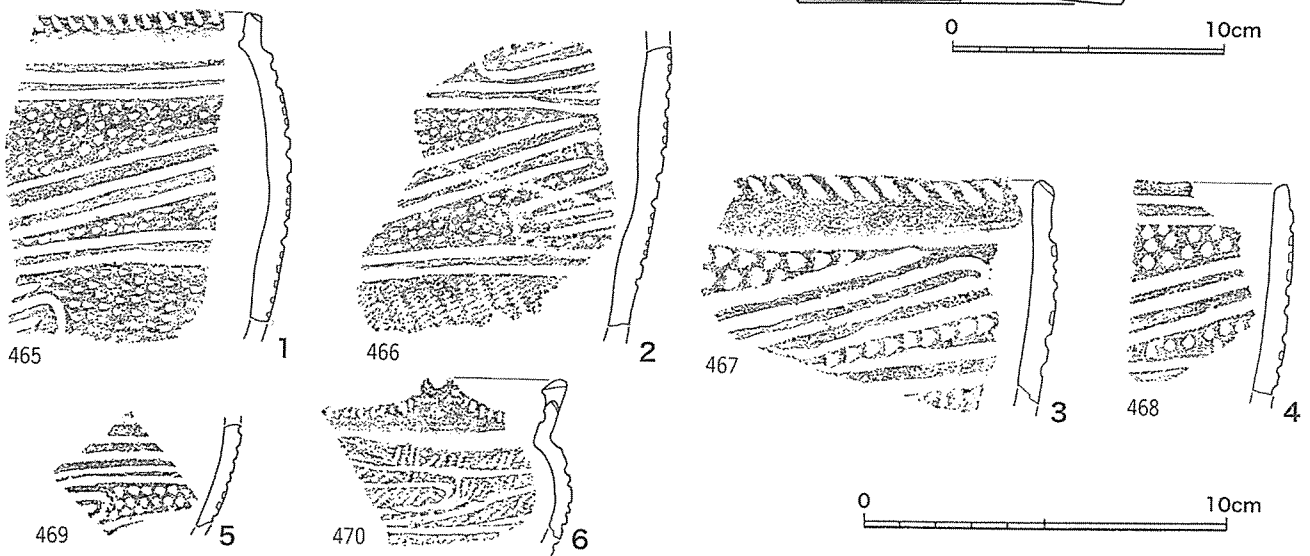
第2図に示した砂沢式の土器は、すべて本州東北北部産の可能性が高い。そう考える根拠は2つである。第1は、油駒遺跡からの出土数が非常に少ないことである。第2は、同時代の日高地方産と考えら



第2図 油駒遺跡出土の砂沢式土器 精製土器 赤石・中岡 (2000) より転載



第3図 砂沢遺跡出土砂沢式土器 高坏・浅鉢
成田ほか (1988) より転載



第4図 油駒遺跡 砂沢式に併行する入組文系土器 赤石・中岡 (2000) より転載

※ 第2～4図の土器拓影および実測図の左下に付された数字は各報告書中の図番号あるいは土器番号である。

れる土器とこれらの土器とでは、胎土の外観に違いがあることである。

今回の調査では、報告書未掲載分も、文様や器形がわかるような破片については、すべて目を通した。それでも、砂沢式と考えられる土器片は、第2図に示されたものの他にはなかった。数万点の破片のうち、12点しかなかったのである。同型式の土器が遺跡周辺で作られていたのであれば、もっと多くの破片が出土していたはずである。

器種に着目すると、高坏の可能性のある破片は2〜3点(第2図1・2・10)であったが、在地の土器には1点もない。また、この時期の北海道では、高坏は在地的な土器の器種としては一般的ではなく、日高地方も例外ではない。第3図2・3のような浅鉢も同様に、北海道全域でも日高でも、基本的な器種ではない。例えば、本州においてそれらの土器を製作していた人間が油駒遺跡に移住してきて、そこで製作したというのであれば、類例がさらに多く出土していてもおかしくないであろう。また、それらの器が油駒遺跡で必要不可欠な器として生産されたのであれば、まったく同じではないにせよ、その類似品が他に出土してもよさそうなものである。だが、実際は、高坏も浅鉢も、器種としては普遍化しなかった。したがって、砂沢式の高坏・浅鉢は、遺跡で製作されたものではなく、その製作の本場である本州東北北部から搬入されたと考えべきであろう。

5. 油駒遺跡から砂沢式土器が出土した理由

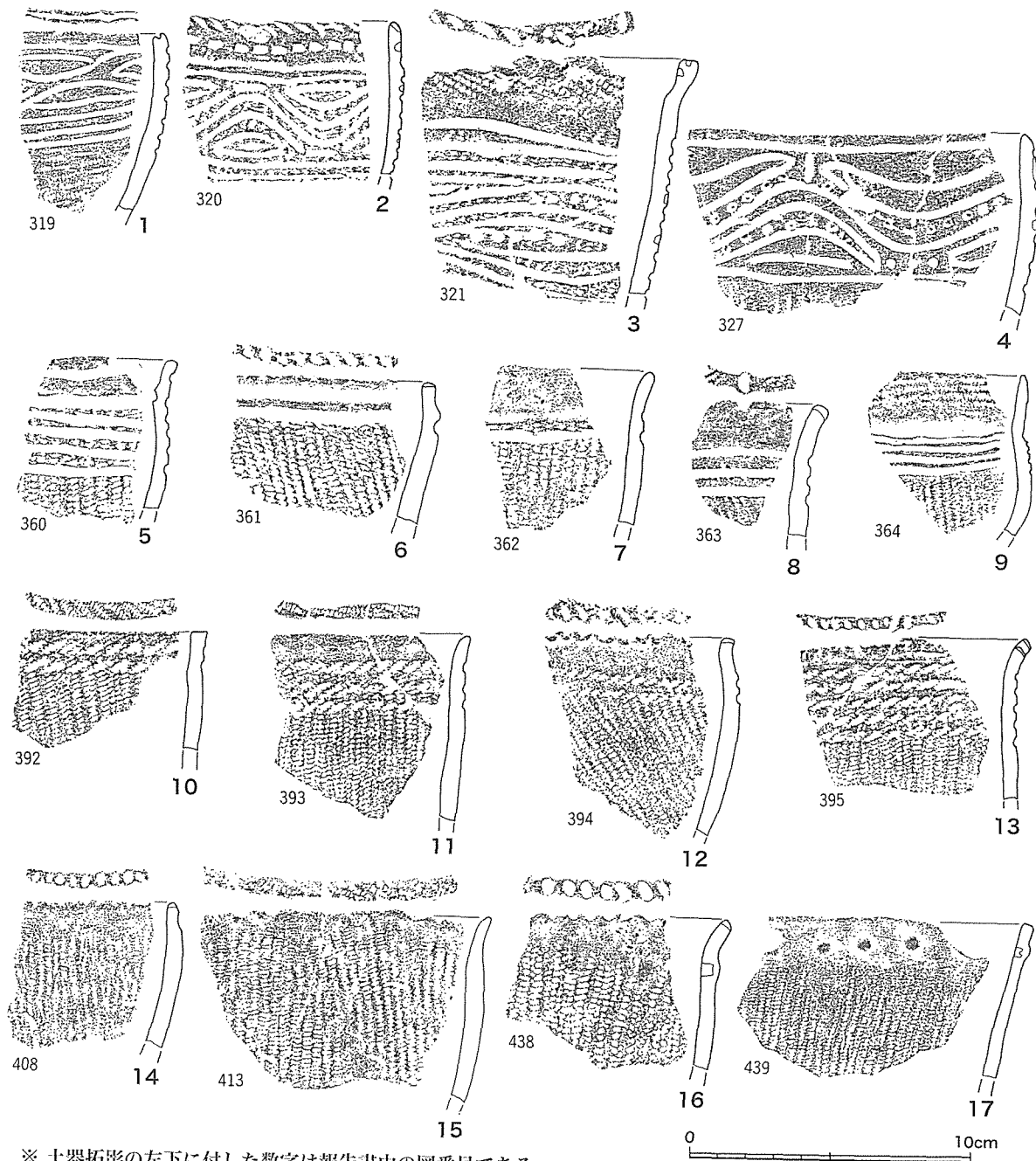
前節で考察したように、本遺跡から出土した砂沢式土器は、すべて高坏か浅鉢の精製土器であり、本州から搬入されたものである可能性が高い。また、それらの器種も、在地では普遍的ではないものであった。それに対し、第5図で示したような深鉢は、どの個体も、北海道内で製作されたものと考えられる。縄線文・突瘤文といった文様は、油駒遺跡や日高地方では数多く出土しているが、本州島東北北部

では一般的ではない。また、口縁部に平行沈線が数条巡る深鉢は東北北部にもあるものだが、これらは砂沢式の精製土器と異なり多数出土しているので、在地産と考えた。

それでは、日高地方のみならず北海道全域においても一般的な器種ではない高坏・浅鉢が、しかも本州産の砂沢式土器そのものものが出土した理由は何であろうか。例えば婚姻によって移住してきた若い女性が持参したといったこともあったのではなかろうか。それに対し、第5図に示したような、油駒遺跡から出土した、平行沈線を巡らす深鉢や入組文的な文様を持つ深鉢などには、婚姻によって移住してきた女性が製作したものも含まれるであろう。

一般に縄文時代は、幼児までの成長期間に亡くなる者が多く、寿命は30歳くらいであったと考えられており、子供を独り立ちできるほどに養育するということは、大人たちの大切な務めであった。したがって、子供の面倒を見る者が必要であり、それに相応しいのは母親であったろう。そのような人は子供の面倒を見ながらできる作業をおこなった。家の周辺での食糧その他の採集、薪拾い、調理、深鉢といった日常使用の土器作りなどである。若い女性が婚姻関係によって移動すると、移動した先で土器作りを学ぶであろうし、自らが若い頃から観察していた技術・文様などを接ぎ木する場合もあったであろう。必然的に、そのような要素はその人々が作った土器に現れることになる。それが深鉢である。そして、日高地方や油駒遺跡出土の深鉢には、東北北部で利用されていたものとの折衷的な要素を持つものがある。第4図に示した連結入組文を持つ深鉢や、第5図1〜4の入組文的な文様を持つ深鉢、同図5〜9の平行沈線を持つ深鉢である。

一方、砂沢式の高坏・浅鉢の要素は深鉢には現れない。深鉢の製作者は高坏・浅鉢といった、時間をかけ、入念に製作される精製土器を作らないからである。しかし、それらの土器自体は持ち込まれた



※ 土器拓影の左下に付した数字は報告書中の図番号である。

第5図 油駒遺跡出土の砂沢式土器併行期の在地的土器

赤石・中岡(2000)より転載

である。その要因として、婚姻による女性の移動を第一の候補にあげておきたい。連結入組文を持つ深鉢が出土している釧路市幣舞遺跡からも砂沢式土器が出土している(石川 1996)。この点は、油駒遺跡との共通点であるが、それは、そのような深鉢を製作した女性が、出身地の精製土器を持参したことからおこった共通項であると考えられるのである。

婚姻とは今も昔も、人間にとって最も重要な出来

事である。それは、個人のために必要のみならず、社会の存続にとっても、必要不可欠である。フランスの文化人類学者クロード・レヴィ=ストロース(1949)は、多くの民族誌や古代の文献をもとに、人類社会は、父・母・子・母方オジの4項を最小要素として構造化されており、互酬制の原理にもとづく外婚による「女性の交換」によって維持されてきたことを読み取り、それは人類普遍の構造に根ざしていると考えた。そして、双分組織の半族どうしで

の交換を「限定交換」、双分組織を持たない社会における限定的ではない交換を「全面交換（あるいは一般交換）」と呼んだ。

婚姻関係が結ばれた共同体どうしでは、女性の手になる深鉢に新たな手法が持ち込まれることもあろうし、ある共通性が見られることにもなろう。前者を示すこととして、本州では連結入組文が深鉢に付けられることはないが、北海道では、そのようなことがおこなわれる場合がある点をあげることができよう。また、後者の例としては、連結入組文を持つ点や平行沈線を巡らす点を指摘できる。

5. まとめと今後の課題

えりも町油駒遺跡から出土した砂沢式土器は、その形態・製作技法・出土量の少なさなどから、東北北部産の可能性が極めて高いと考えられた。それらは、東北北部から婚姻によって移動してきた若い女性によって持参されたと考えた。その出身地が津軽地域なのか、下北地域なのか、八戸地域なのかを特定するのは今後の課題である。

また、入組文系の土器や、平行沈線を持つ深鉢は、移住者によって製作されたと推測できた。その出身地の一つに、下北半島あたりを入れることができよう。そして、人々の移住の要因として、婚姻による女性の移動を考えてみた。

今後、油駒遺跡出土の砂沢式土器の胎土分析を実施して、それらの土器が東北北部のどの地域からの搬入品であるのかを明らかにしたい。また、釧路市幣舞遺跡から出土している連結入組文が施された土器や砂沢式土器も観察し、本稿で述べた、婚姻による女性の移動による土器の変化および土器の移動について、より具体的に論じたい。

謝辞

試料の実見に際し、えりも町郷土資料館学芸員の
中岡利泰氏にたいへんお世話になりました。記して

感謝申し上げます。

註 これは福田(2007)では連結入組文と呼ばれるが、品川(2005)では連繫入組文とされる。また、波状文(須藤1970)という呼び方もあるが、福田が考えるように、文様自体の系譜を考えるならば入組文の範疇で捉えられるので、ここでは連結入組文と呼ぶ。

引用・参考文献

赤石慎三・中岡利泰 2000『油駒遺跡』えりも町教育委員会

石川 朗 1996『釧路市幣舞遺跡調査報告書』III 釧路市埋蔵文化財調査センター

葛西 励・高橋 学 1991『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』川内町教育委員会

クロード・レヴィ=ストロース 1949(福井和美訳 2000)『親族の基本構造』青弓社

品川欣也 2005「4. 砂沢式土器の細分と五所式土器の位置づけ」石川ほか『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』31-42頁 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書

須藤 隆 1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56巻2号 10-65頁

成田正彦ほか 1988『砂沢遺跡 図版編』弘前市教育委員会

— 1991『砂沢遺跡 本文編』弘前市教育委員会

福田正宏 2007『極東ロシアの先史文化と北海道』北海道出版企画センター